## 論文番号　２１４

**担　当**

滋賀医科大学　福祉保健医学講座

**題　名（原題／訳）**

Predictors of tobacco and alcohol consumption and their relevance to oral cancer control amongst people from minority ethnic communities in the South Thames health region, England

英国南テムズ地区の少数民族でのたばこ・アルコール消費と口腔癌予防について

**執筆者**

F.A.Khan, P.G.Robinson, K.A.A.S.Warnakulasuriya, J.T.Newton, S.Gelbier, D.E.Gibbons

**掲載誌（番号又は発行年月日）**

J Oral Pathol Med 29:214-9,2000

**キーワード**

alcohol;ethnicity;pan chewing;risk behaviour;tobacco

**要　旨**

（背景）咽頭癌の発症率には、地域的格差がある。その原因因子として、喫煙や噛みタバコ、飲酒などがあるとされており、現在ヨーロッパの多くの地域で増加している。そこで、イギリスにおいて幾つかの民族集団における飲酒や喫煙などの健康関連行動を決定させる要因について検討した。

（方法）イギリスのサウステームズ地域において、質問紙による断面調査を行った。黒人ーアフリカン、黒人ーカリビアン、インド民族、パキスタン民族、バングラデッシュ民族、中国／ベトナム民族といった民族グループに自己分類によって分類、同定された。総数 1, 113 名がこの研究のために募集された。

（結果）飲酒、喫煙を引き起こさせる原因として、教育、職業、性、英国で生まれたかどうかについて検討を行った。全ての民族集団で、男性は女性より喫煙率が高かった。黒人ーカリビアンにおいては若年者に喫煙しやすかった。ベテル・チューイングや噛みタバコは南アジア民族によく見られ、飲酒量は黒人ーカリビアングループにおいて多かった。飲酒、喫煙、噛みタバコについてロジスティック回帰分析を行ったところ、黒人ーアフリカンにおいては、16 歳以上まで教育を受けたものが飲酒しやすい傾向がみられた。また、インド民族において雇用されている群と、イギリスで生まれた群に飲酒しやすい傾向がみられた。インド民族においては、16 歳以上まで教育を受けてきた者が噛みタバコを嗜好しやすかった。バングラデッシュ民族において、16 歳以上まで教育を受けることと、噛みタバコを嗜好することは逆相関関係にあった。

（結論）アルコールとタバコの嗜好は、民族グループの間で違いがあった。この研究によって、アジアのグループでは喫煙によらないタバコの嗜好（噛みタバコなど）が多いこと、飲酒が黒人ーカリビアンに多いことが判明した。年齢、性、教育、イギリス外で出生したことは、移民系住民にとって飲酒、喫煙習慣を予見する重要な因子である。今後、これらの民族系住民に対して、健康増進のための介入、特に癌のコントロールへの適当な手助けをするために、危険因子となる健康関連行動を調査することは重要である。各々の民族グループにおける、対象を確定させた健康介入の可能性については、今後さらなる研究を必要とする。この研究の知見は、イギリス南部に住む移住系住民の口腔内がんコントロールに重要な知見となるであろう。